

---

---

# 日本台湾学会 ニュースレター

*The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies*

---

第 40 号

---

<目次>

巻頭言	… 1
特集 台湾の変化を感じたとき	… 3
学会活動報告	… 18

---

---

## 巻 頭 言

「台湾能、為什麼日本不能？」

日本台湾学会理事長 松田康博

コロナ禍のこの1年余り、日本在住の台湾研究者の最大のストレスは、台湾に行けなくなったことだろう（台湾在住の人も同様に日本に来られなくなった）。あんなに近かったのに、しょっちゅう行けたのに、次に行った時やろうと思っていたことがたくさんあったのに、突然行けなくなるなんて！

フィールドワークが必要な領域や、現地の資料を見なければならぬ領域の研究者は、研究が全

く進まない。特に若手研究者は、学位論文が書けなくなり、将来が見通せなくなっている。世界中の人々がコロナ禍で抱えるストレスに加えて、台湾を研究する我々と我々の周りには、こうしたストレスが延々とたまり続けている。

台湾研究者なら、もう一つ別なストレスも感じることに、同意する人が多いだろう。それは、日本のコロナ対応が、台湾に比べてあまりに立ち後れていたことである。台湾から「台湾能、為什麼日本不能？（台湾にできて、なぜ日本にできないのか?）」という言葉が聞こえてきたのだ。

贅言を要しないが、台湾のコロナ対策はパーフェクトに近い。市中感染がほとんどない上、死者も10数名しかいない。人々はコロナ前に近い生活を送っており、2020年の経済成長率は2.9%を記録し、世界中から賞賛を受けている。

私は、コロナ流行の初期である2020年2月初旬に台湾に出張していたが、すでに病院だけでなく銀行などでも、入り口で検温・消毒させられた。病院では早くも出入りの導線管理がなされていたし、有名な大病院の医師たちが、テレビに出演して、マスクの仕方や手洗いの仕方に至るまで、丁寧に説明していた。

それにひきかえ、日本の対応は、早いもので台湾の2カ月遅れだった。なぜ何もしないのか、なぜこんなに遅いのか、なぜ入国制限をほとんど放棄しているのか。当時自分がFacebookで書いていたことを見返すと、日本の無為無策と、台湾の素早い対応を、リアルタイムで見比べてしまったが

ゆえに、相当なストレスを感じていたことに気づかされる。

昔、台湾の書店に並んでいた本に、『日本能、為什麼台湾不能?』という題名があったことを思い起こすと、文字通り隔世の感がある。

しかしながら、我々にはストレスを嘆いているヒマなどない。台湾のパーフェクトなコロナ対策が生み出した社会的影響がすごかったからだ。それは、ネーション・ビルディングのための「国民戦争の大勝利」のような機能を果たし、より多くの台湾住民が台湾人であることを誇りに思うようになった。唐鳳（オードリー・タン）は、日本でも押しも押されぬオピニオンリーダーになった。台湾の声は今や世界に届く。コロナは台湾社会の変化を促進し、台湾と世界との関係を劇的に変える触媒となった。

コロナ禍は、我々がオンラインで世界とつながれることを、なかば強制的に教えてくれた。そこで、我々の課題がくっきりと浮かび上がって来た。台湾の友人達は、中国語や英語の世界において、オンラインでアグレッシブな対外発信を続けている。台湾では明白に「オンライン化＝国際化」なのである。これについて行けなければ、またもや「台湾能、為什麼日本不能?」と言われてしまいかねない。

日本台湾学会も、この「オンライン化＝国際化」の波に洗われている。多くの会員が、台湾やその他の国際会議に誘われる機会が増えたと感じているはずだ。早朝アメリカで講演、午前中に授業、午後に台湾の国際会議、そして夜に仲間内の勉強会に参加、というスケジュールが可能になり、実際に身の回りで起きている。

実はコロナ前から本学会は英語による対外発信が求められていた。*Journal of Contemporary East Asia Studies*に、日本台湾学会賞受賞作品をコンパクトに英訳して投稿する「対外発信強化プロジェクト」は2020年に始まった。日本で刊行された台湾研究の専門書の書評原稿や、学術大会の概要を紹介する記事の *International Journal of Taiwan Studies* への提供もすでに始まっている。

コロナ後には、2020年10月2日に行われた第147回定例研究会（東京）がある。これは北米台湾研究学会（NATSA）および欧州台湾研究協会（EATS）との共催で、Global Taiwan Cultural Salon と題して英語で行われた。日本台湾学会からも3名の報告者をたてて、活発な議論を展開した。

最近の日本台湾学会は中国語のみならず、英語

での活動が激増している。台湾人の国際学術活動では英語が主要言語である。こうした動きに、我々は欠席できないのである。

ただ、自宅の部屋でパソコンに向かってこんなことばかりしていると、運動不足になり、目も疲れる。台湾の会議でオンライン発表をした後、ぶちっと通信が切れて我に返った後は、異常に虚しい。友人達と食事をしながら談論風発することができず、ぽっかりと心に空いた穴は、簡単に埋まりそうにない。

それでも、やはり我々は台湾人に学び、彼らの柔軟性を貪欲に吸収した方が良い。「オンライン化＝国際化」の課題から、目を背けてはならない。「台湾能、日本也能」と胸を張って言えるようにしたいものだ。

次に台湾を訪れる時は、以前にもまして、どっぷりと台湾につかろう。台湾よ、待っていてくれ。次に出会うときは、お互い一皮も二皮もむけているはずだ。旧交を温め、励まし合い、飯を食い、たっぷり無駄話をするのだ。

その日を夢見て、今日もまたパソコンの画面とにらめっこである。

## 特集

### 台湾の変化を感じたとき

#### 台湾資料の収集、そして復刻 —50年間の歩み—

河原 功（台湾協会）

拙著『台湾渡航記—霧社事件調査から台湾文学研究へ』（村里社、2016年5月）にも書いたことだが、私が初めて台湾を訪れたのは1969年。中央研究院民族学研究所の王崧興・吉原弥生先生宅に5週間ほど滞在させていただいた。お二人からの影響で、原住民及び霧社事件に興味を覚え、霧社、日月潭、烏来を訪ねたり、台湾大学考古人類学系に顔を出したりしたが、観光目的だったため、台湾各地を巡って写真を撮りまくっていた。いっぽう台湾大学の研究図書館では呉美恵参考股長から書庫に入っての閲覧許可を得ることができた。

1971年に2度目の台湾訪問を行い、7週間近く滞在した。卒業論文で仮名草子を扱うつもりだったが、台湾文学に興味を抱き始めたことを指導教官の前田愛先生に相談したところ、台湾文学研究への背中を押してくれた。果たして研究できるかどうか、その確認のための台湾訪問だった。

台湾大学では総図書館の典蔵股に籍を置き、曹永和股長の配慮で書庫に自由に出入りさせていただいた。参考になりそうなものは次々とコピーしていった。コピーは自分ではできず、申込書に記入してそれ専門の係員に依頼する方式だった。しかし、総図書館に台湾資料がそれほどあるわけではなかった。とりわけ、台湾文学に関する資料はほとんどなかった。というよりも、台湾文学がどういうものであったのか、私自身、知識に欠けていた。

たまたま典蔵股で考古人類学系の陳奇祿教授に会い、寧波西街の古亭書屋（高賢治）を教えていただいた。古亭書屋では台湾資料を多く復刻しており、印刷・製本ともに貧弱だったが、研究する者としてはありがたかった。

古亭書屋近辺は台北一の古書街「牯嶺街」でもあった。店舗を構える店は20軒ほど、露店も60軒ほどあった。足繁く通って、『決戦台湾小説集』

『サヨンの鐘』『蕃人ライサ』『争へぬ運命』、雑誌『文芸台湾』『台湾文学』『媽祖』『愛書』などを購入していった。日本語の台湾資料は全体的に高額だったが、今から考えるとかなり安かった。とは言え、汚れや崩れや破れがひどかった。

これで卒業論文を提出したわけだが、恥ずかしいほどお粗末な出来だった。なにしろ、先行研究はなし、指導してくれる先生もいない、『台湾青年』『台湾民報』も『台湾新文学雑誌叢刊』も復刻されていない時代に書き上げたわけだから。

そこで、未熟な研究で終わらせたくなかったので、大学院に進学して台湾文学研究を継続することにした。

第3回目の台湾訪問を1973年春に実施、2カ月ほど台湾に滞在した。

台湾大学では、曹永和氏が研究図書館の館長に就任していたおかげで、館長室の片隅をあてがわれ、書庫にも自由に出入りが許された。研究図書館には台湾資料が比較的多かった。『興南新聞』もここで初めて読むことができた。

館長席の後ろの書棚に『台湾総督府警察沿革誌台湾社会運動史』（秘）があり、それを見せてもらった時の興奮は今も忘れられない。風林書房（東京）から復刻版（1969年）は出ていたが、原本が台湾に残っていたことは驚きだった。

また、ここ研究図書館には、貴重な江戸期の和本も大量にあった。一室に収蔵されていたが、閉館時には空調を止めているため室内は高温多湿、保存状態が悪く、虫食いが激しく、末期的な状態にあったのを記憶している。

いっぽう池田敏雄氏に王詩琅氏を紹介してもらい、さらに王氏から台湾省立台北図書館（その後の、台湾省立中央図書館台湾分館、国立台湾図書館）の劉金狗さん、高組長を紹介していただいた。そのおかげで、図書館では数々の便宜を図っていただいた。閲覧者用のコピー機は1台しかなく、混みあっている時や機械の調子の悪い時には事務室のコピー機を使わせてもらったことは有難かった。

牯嶺街での資料収集は拍車がかかって、『鄭一家』『清秋』『青少年劇脚本集』『新聞配達夫』『アジャの孤児』『台湾民間文学集』、雑誌『風月報』『台湾文学』『民俗台湾』『台湾詩薈』『台湾芸術』『台湾公論』などを購入できた。総督府警務局『霧社事件誌』（秘）の写本（楊仲鯨）を購入したことは興奮する一事だった。

書店とも仲良くなり、二二八事件の関係書籍やその他の禁書も売ってくれるようになった。所持金が足りない時には次回払いに応じてくれたこともあった。

第4回目の台湾訪問は1973年夏で、6週間ほど台湾に滞在した。

このころ、牯嶺街で営業していた露店は、道路計画が何かですべて撤退させられて、八徳路の光華商場に移転となっていた。店舗を構えている松林書局、易林書局、人文書舎等の10店舗ほどは牯嶺街に残っていたが、人の流れが変わってしまい、牯嶺街一帯は活気が失せていた。

いっぽう光華商場の古書店は半地下にひしめき合っており、賑わっていた。しかし、冷房がないため蒸し暑く、扇風機の風でほこりとカビが舞い、トイレの悪臭も漂っており、不衛生極まりない環境にあった。本探しする私にとっても苦難だった。

当時、印刷品として日本に送り出せるのは1箱5キロまでだった。購入した資料は、郵便局で専用の箱を購入してそれに詰めてせっせと自宅宛に発送した。40箱から、時には60箱になることもあった。宛名書きも大変だったが、梱包前に税関検査を受けなければならず、時間も手間もかかった。昼近くに持っていくと、検査官の昼休みで1時間きっちり待たされることもあった。

その後も台湾に行くたびに光華商場を訪れたが、台湾資料は店頭から減るいっぽうだった。古書店は徐々にCDやビデオを扱うショップに転換していき、光華商場の魅力はなくなっていった。

1980年代は台湾に行く機会が少なく、1981年に1回だけ、しかも1週間ほど滞在しただけだった。

1990年代から2000年代には、光華商場の隣に出来た「新光華商場」に行くようになった。地下に骨董店が何軒か入居していたが、その中に「百城堂書店」があった。店主の林漢章さんは古書に通じた、穏やかな人。訪問すると美味しいお茶を入れてくれ、購入すると必ず割り引いてくれた。店舗はその後近くの電気街に移転したが、20年は付き合ったと思う。

また、牯嶺街近くの南昌街、「妙章書局」にも立ち寄ることが多くなった。骨董も扱う割と大きな古書店である。台湾資料を多く販売していたが、破れや汚れで資料価値を損ねているものが多く、それでいて価格はかなり高めだった。「これは昔の付け値だ」と言って、強気の商売をしていた。しかし、この店にはかなりの金額を注ぎ込んだ。

2010年代には龍泉街の「旧香居」に行くことが楽しみだった。店内は、ここが古本屋かと目を疑うほどサロンのようにきれいで洗練されている。文芸書や美術書を専門にしている。価格はそれ相応だが、私自身たいていのものは所蔵しているのであまり買うことはない。ケースに入っているもので買いたいと申し出ると、それは展示品だと言

って売ってくれない。図録を何冊か出版していて、貴重な情報を提供してくれている。

台湾にはこれまでに70回ほど訪問し、そのたびに数多くの台湾資料を購入、またコピーしてきた。しかし、それらを持ち帰ったことで、台湾関係の資料を複製することができ、台湾研究者に便宜を図ってきた。『霧社事件誌』『台湾人士鑑』『台湾大年表』『台湾六法』『台湾出版警察報』、雑誌『台湾大衆時報』『風月／風月報／南方／南方詩集』『旬刊台新』『新建設』『翔風』をはじめ、中島利郎先生、下村作次郎先生ら台湾文学研究者と共同して多くの台湾文学作品の複製に努めてきた。複製にあたっては、不二出版、緑蔭書房、ゆまに書房、南天書局（台北）等に協力していただいた。

このことは、私の台湾研究として、研究以上の価値があったと自負している。あの時代に資料を収集しなかったとしたら、消失してしまったものもあったと思うからである。そして今、『台湾公論』『台湾芸術』『台湾児童文学集成』『蕉葉会報』の複製をなすべく、計画を進めているところである。多くの研究者が同時に公平に享受できるように、関係者の協力を得て、今後も資料の発掘と複製に努めていきたい。

## 思い出すまま —「台湾の変化」に寄せて—

春山明哲

「台湾の変化」という「お題」を編集部から頂いて、はたと困った。台湾が戒厳令時期を脱して、いわゆる「本土化」と「民主化」のダイナミックな変化(静かな革命)を遂げたプロセスについて、研究もしていなければ、その現場を見聞きもしていない。現代台湾についての私の情報源は、若林正文氏の『海峡——台湾政治への視座』(研文出版、1985年)から始まる一連の「同時代史」がほぼすべてのようなもので、かつて李承機君にそう言ったら、「それで十分ですよ」と笑われたことがある。というわけで、一度は編集部にお断りしたのだが、「それでもよい」ということらしいので、ともかくもお引き受けした。

「思い当たる節」と言う言葉がある。あとになって「ああそうだったのか」と納得することだが、語感としては、なお新たな疑問も生じたな、というニュアンスがあるように思う。「台湾の変化」ととらえる方法のひとつは、「台湾人とはなにか」について考えることではなかろうか。より正確には、「台湾人とはなにか、についてより多くの人々が考え始めた」ことが変化の始まりだったのではない。

『台湾と台湾人』という本がある。戴國輝氏が1979年に出した本で(研文出版)、このタイトルに当時衝撃を受けたことを覚えている。それまで戴さん(こう呼ばせていただく)は「中国人」だと思っていたし、地理的な意味で「台湾人」であっても、それ以上の意味はない、むしろ避けている、と感じられたので、正面きって「台湾人」という語を使うことに意外の念を抱いたのである。副題に「アイデンティティを求めて」とある。あとで「認同」という中国語があると(たぶん)戴さんから教わった。

本書の唯一の書き下ろしの、書名と同じタイトルの文章は、今再読してみると、台湾の歴史の重層性と「台湾人」の多様な来歴と複雑な自己認識を、複数の登場人物に語らせながら、戴さん自身の「客家系台湾人」かつ「台湾省籍中国人」という自己規定を持ち続けることの意味を問う、という非常に込み入った構成を取っている。「台湾人のアイデンティティ」とはなにかを自己存在にひきつけて問う、という課題は、1979年(カーター米大統領の中国承認の年)の時点では、まだ(私にとっては)実感に乏しいものであった。しかし、「族群」という後に知った概念からふりかえると、

「思い当たる節」があった文章で、戴さんは台湾の変化の予兆を感じていたのではなかろうか。

戴さんの話を続けると、1996年台湾に帰って李登輝総統の政権に参加したあと、数年にして袂を分ち、『李登輝その虚像と実像』という王作榮との対談を出した(草風館、2002年)。戴さんは2001年に死去したから、日本語で出た最後の遺著である。私が一驚したのは、この中で具体的に書かれた李登輝と戴國輝の関係で、その多くがほとんど初耳といってもいい事実である。二人の最初の出会いは、1961年戴さんが総幹事を務める東大中国同学会で、李登輝を講師として招いたときのことだという。前年の1960年(いうまでもなく「60年安保」の年)、東大中国同学会が設立され、その少し前には、王育徳が『台湾青年』を創刊、独立運動を開始している。『自由中国』の雷震が逮捕されたのもこの年である。

王育徳といえば、この人こそ「台湾人」を近代国家の主体として考察した人としてまず指を屈すべきであろう。戴國輝の『台湾と台湾人』も、王育徳の主張を十二分に意識して書かれた、否むしろそれを批判する対抗言説という側面もあった。であるがゆえの「衝撃」もあったのかも知れない。しかし、1985年に王育徳が61歳で亡くなったとき、あれほど「台独派」を嫌っていた戴さんが、ポツンとその死を悼む言葉を発したのを聞いたことがある。どんな言葉だったか忘れてしまったが、確かにレスペクトのニュアンスであった。

『台湾青年』では、矢内原忠雄が亡くなったときに弔文を載せている。また王育徳は台湾の歴史の研究を始め、人物評論の連載中で後藤新平を取上げてもいる。私が「日本における台湾史研究の100年」(『アジア経済』2019年12月号)で、台湾留学生による戦後台湾史研究の前史に王育徳を位置づけたのは、1964年の『台湾——苦悶するその歴史』(弘文堂)もあるが、加えてその増補改訂版『台湾』に所収の、「私はいかにして『台湾』を書いたか」という文章を読んだからである。この中で、雑誌『中央公論』の編集者の粕谷一希氏の示唆により、京大人文研究所の上山春平氏の助力を得て出版の運びとなった、といういきさつも書かれている。粕谷氏は早くから『台湾青年』に着目していたのである。

さて、戴さんの事績については、2011年に刊行した『戴國輝著作選』2冊(みやび出版、2011年)の参考資料としていただいた、詳しい年譜稿で確認しているのだが、あらためて眺めると「思い当たる節」がいくつもある。東寧会、のちの(後藤新平研究会を経て)台湾近現代史研究会が解散したのは1987年のことであるが、年譜稿でみると、

翌1988年から戴さんは頻りに台湾に行き(帰り)、李登輝氏にもたびたび面会しているほか、中国でも台湾問題について講演し、多くの史跡を訪れ、アメリカ、ヨーロッパなど世界中に出かけている。1996年5月の台湾帰国と政権参加にいたる助走と準備のためでもあろう。しかし、2001年1月の死去までわずかに4年半、戴さんの台湾論・中国観をついに聞く時間がなかった。

こうしてみると、戴國輝の李登輝論もそう単純に論ずるわけにはいかない。少なくとも日本を離れる前の、『台湾という名のヤヌス——静かなる革命への道』(三省堂、1996年)を併せて考える必要がある。この中で印象深かったのが、李登輝と司馬遼太郎の対談で出た、旧約聖書の「出エジプト記」をめぐる戴國輝の考察である。今にして思えば、戴さんはクリスチャンとしての李登輝を念頭に置いているのではなかったか。

「台湾の変化」のあとだいで経った2007年の台湾行きの際、李登輝氏に会う機会があった。短い表敬訪問のはずが、長いインタビューになったのは、私が氏の米国留学の思い出を伺ったためであろう。統計学を農政に応用するという新しい学問を学ぶ、というのが渡米の動機だったという。この二日前に、私は中央研究院に李遠哲博士を訪ね、翌年の日本台湾学会の記念講演を依頼している。「三日間に二人の「李」に会った」と言ったら、台湾の友人が驚いていた。

李登輝氏とは、同年6月の後藤新平賞第1回授賞式のあとの午餐で談ずる機会があり、戴國輝の名も(敢て)出してみたが、氏は沈黙されていた。この授賞式のときに、記念の楯を李登輝に手渡したのが先述の粕谷一希氏で、氏は当時「後藤新平の会」の代表幹事であった。李登輝は「後藤新平と私」と題して受賞講演を行ったが、その中でクリスチャンとしての信仰に触れ、後藤新平との精神的繋がりで講演を結んでいる。

李遠哲博士とは、私が応用化学出身であること、それにノーベル化学賞の受賞論文も読んでいったためか、随分話も弾み、戴さんのことにも及んだ。つまり、私にとって「台湾における戴國輝」が、台湾の変化の重要な尺度だったのだ。李遠哲博士との対話で覚えているのは、中央研究院における台湾研究の制度化をめぐる問題だった。米国流の学術研究の制度においては戴國輝は収まらないしかなかった。

一方、私とはといえば、1980年代末から90年代の台湾の激動期に国立国会図書館の仕事が忙しくなり、研究も「予備役編入」のようであったが、ある時、駒込武氏が訪ねて来られ、ついで陳培豊さん、何義麟さんを紹介された。何さんから『二・

二八事件——「台湾人」形成のエスノポリティクス』(東京大学出版会、2003年)をいただき、「台湾人」が学問研究の対象となっていることを印象付けられた。台湾研究の「ヌーベル・バーグ」がついにやってきたのだ。そして、2002年、若林氏と呉密察氏の共同主宰による、日本と台湾の青年研究者交流会議という場で、台湾近現代史研究会の思い出を報告する機会があった。「論文で名前を知っているが実際に会ったことがない人」という基準で白羽の矢が当たったらしい。日本台湾学会の創立ももちろん画期的なことであったが、個人的には駒場エミナースで若手研究者に接したこと、とりわけ台湾における歴史研究環境の大きな変化を目の当たりにしたことが、私を「現役」に引き戻すきっかけのひとつになったのである。

李登輝、戴國輝、これに王育徳を付け加えよう、この三人の「台湾人」に共通するものはなにか。それは「日本」との関係である。「日本人」との、こういってよければ、アンビバレントな関係である(日本人には、後藤新平が含まれる)。台湾人の歴史研究がこの三人の「射程」を過不足なく捉えうるとき、歴史の闇の奥行きが見えるにちがいない。

(2021年2月4日稿)

## 「台湾学」の誕生 私見

黄英哲（愛知大学）

戦後、台湾研究が日本の学術界において、一つの独立した学問分野になり得たのは、私見では、戦後初めて日本に留学した世代の活動が大きい。黄昭堂氏、許世楷氏、劉進慶氏、涂照彦氏、戴天昭氏や、彼らよりやや早くに留学した王育徳氏などの、台湾人留学生による台湾研究の成果が日本で続々と出版された。また、同じく戦後初めて日本に留学した台湾人の戴國輝氏が、1970年初夏に「台湾近現代史研究会」を設立し、『台湾近現代史研究』を発行したことも関係が深い。この刊行物が1970、80年代の日本の学術界において、台湾研究に関する唯一の高い水準を誇る学術刊行物であったことは、周知のとおりである。

そして最も重要なのは、1998年5月に、若林正文氏の呼びかけによって、日本台湾学会が設立され、翌年5月に学会誌『日本台湾学会報』が創刊されことだろう。これによって、台湾研究が日本の学術界において、独立した一つの研究分野となる流れが加速したのである。

では、台湾研究は一体いつごろから始まり、また「台湾学」はどのように誕生したのだろうか。これは私が常に考えてきた問題である。

19世紀半ば以降、西洋の宣教師や博物学者らが、台湾の文化人類や自然環境について調査を開始した。その研究成果が専門誌上で発表されるようになることで、台湾研究は近代の知識生産体制の中に組み込まれた。

西洋において始まった近代の学術体制と知識分類の構造は、帝国主義と植民地主義の拡張を通じて、世界的な知識生産の構造へと変化し、それまで各地域に存在していた知識体制にとって替わった。非西洋世界では、自ら近代国家を建設し大学制度を導入することで、国家の支持の下、学術を近代化し、近代的な学知体系を導入した。あるいは、歴史上、植民地とされた地域では、宗主国の影響を受けて知識生産体制の中に引き入れられ、研究対象とされた。いずれにせよ、その後の植民地解放の世界的な歴史の流れのなかで、政治体制が独立を果たすと、学知体制も継承や変化を経て、自国の知識生産体制へと転換した。

近代の学知体系は、まさにこのような歴史の流れを経て、西洋を起源とする世界的な制度へと変化していった。そして、台湾研究もこのような流れの中で、徐々に自らの歴史と現状を形成していった。歴史上、多くの政治体制と知識体制の影響

を度々受けてきた台湾では、自然科学や人文科学の学術領域は、研究対象から、自己認識のための知識へと変化していったのである。

19世紀半ばから現在まで、専門機関、大学制度、研究グループ、個々の研究者の努力によって、台湾研究はこれまで一定の成果を積み重ねてきた。その研究の目的が、研究対象自体にあらうと、あるいは自己理解のためであらうと、これまでに蓄積された研究成果やその研究者たちは、今後我々が引き継ぎ発展させていく歴史的資源となる。

初期の博物学の段階から、次第に各分野へと、研究領域は発展し、一地域の研究報告から、自己の問題意識を生み出すまでの研究へと成長した。西洋や日本帝国の枠組による知識基盤から、台湾自身のやり方で、自己理解と世界貢献のための知識を構築するまでになった。台湾研究は、自己理解と世界参加という、二つの異なる目的に揺さぶられながら、それぞれの分野において異なる時期に発展してきたのである。

台湾があるからこそ、台湾研究があり、また「台湾学」と呼ぶべきものが誕生した。そして、台湾が主権独立の政治実体を維持し続ける限り、「台湾学」は発展し続けるだろう。さらに、その他の東アジア研究と比較参照しあうことで、「アジア学」全体へと視野を広げていくことができると考えている。

（拙文の内容は部分的に、筆者と台湾大学の梅家玲先生が共同で執筆した、「台湾研究先行者系列刊行辞」と重複している。同系列は2014年より、台湾大学出版中心より刊行が始まった）

## 日本社会における台湾認識の変化 —無知・無関心の歴史の由来を考える—

駒込武（京都大学）

2020年は、日本社会における台湾認識に重要な変化の兆しがあらわれた年であったと感じる。台湾政府の新型コロナウイルス感染症対策が、日本政府よりはるかに合理的で的確であることが誰の目にもあきらかになり、デジタル担当相唐鳳（オードリー・タン）の鋭い感受性と自由な思考を伝えるインタビュー記事がさまざまな雑誌に掲載された。

2000年前後にも、小林よしのり『台湾論』などをめぐって台湾は脚光を集めた。だが、この時には「親日的」という一面的な（と少なくとも筆者には思える）イメージばかりが強調されていた。それに比すれば、「民主的」「多元的」「開放的」というイメージは、それまでの無知・無関心の裏返しとして過剰に理想化しているところがあるにしても、台湾社会におけるこの30年近くの変化に連動・追隨している点で、「一步前進」と考えてよいだろう。

それにしても、いまだこの変化は空気のような次元に止まっている。「民主的」「多元的」「開放的」な社会を目指す意志がいかんして生じてきたのか、歴史認識を介して広く共有されているわけではない。台湾史研究は細々と（？）続けられてきたものの、歴史研究のメインストリームとは今にいたるまで隔たりがあると言わざるをえない。

例えば、筆者は大学院ゼミで藤井忠俊、鹿野政直、ひろた・まさきなどによる民衆史研究を読みながら、台湾が視野の外に置かれていることへの戸惑いを覚えざるをえなかった。藤井は「外地」において日本民衆はファシズムの下士官候補であったと鋭く指摘し、鹿野は伊波普猷に即して沖縄近現代史を掘り下げた。だが、台湾についての言及はほとんどない。わずかにひろたが晩年に植民地台湾における竹久夢二について論じた仕事を見出せる程度である。諸氏の仕事が「戦後歴史学」の最良の研究成果であり、「差別」の問題に繊細な関心を寄せているだけに、戸惑いも大きくなる。

だが、気づいてみれば、これは他人事ではない。1980年代に大学生・院生として研究者への路を歩んだ自分も、東アジア史を志向しながら台湾史には無知・無関心だった。TK生『韓国からの通信』などを通じて韓国民主化運動に関心を寄せ、竹内好の論ずる魯迅に惹かれて中国語を学び始めたものの、自分の視線がまず向かったのは、旧「満洲」であった。

1989年に天安門事件のため中国行きフライト

をキャンセルせざるをえなかったために、「台湾にでも行ってみよう」という（今から思えばはなはだ失礼な）感覚で台湾を訪れたのだった。その後、すっかり台湾にはまって今にいたるわけだが、もとのきっかけは他律的なものであった。そこには自分個人に止まらず、おそらく構造的な問題が横たわっている。

台湾は最初の海外植民地であり、半世紀に及ぶかかわりをもっていた。それにもかかわらず、なぜ容易に忘却できたり、無視したりできたのか？ いまだ確たる回答があるわけではないものの、考える糸口となりそうなポイントを4点指摘しておきたい。

第1に、「左翼」としてのバイアスである。戦後日本の知識人、とりわけ歴史研究者の世界では、「左翼」の影響力が強かった。学生時から講座派マルクス主義の歴史学を「つまらない」と冷ややかに見てきた筆者も、「左翼」の思想的潮流の中にあつた（たぶん今も）。そこには中国革命を理想化する空気が強く働いていた。

中央研究院台湾史研究所の呉叡人（ごいじん）は、この空気を次のように描き出している。「東アジアに関して、台湾海峡に関して、中国革命が創造した歴史意識は、今日に至るまで依然として巨大な影響力を知識人に及ぼし続けている。革命はずでに裏切られている。しかし、革命はまだ過去のものではない」（呉叡人著／拙訳『台湾、あるいは孤立無援の島の思想』みすず書房、2021年）。「毛沢東 vs 蒋介石」という冷戦的な認識枠組において、「蒋介石の支配する島」は関心の埒外に放り出されたのであつた。

第2に、侵略戦争をめぐる罪責の明確さと、植民地支配をめぐる罪責の見えにくさがある。戦中に日本軍兵士が中国大陸で行った残虐行為への罪責は意外に広く共有される一方、植民地については、「恩恵を与えてやった」という意識が連綿と続いてきたのではないか。

台湾の統治体制は朝鮮よりも専制的だったが、総督府が機先を制して近代的民族運動を抑え込んだために、その暴力性は見えにくいところがあつた。加えて連合国による東京裁判も「満洲事変」以後のことしか訴追しなかった。「戦争責任」という言葉は敗戦直後から使われてきたが、「植民地責任」という言葉が使われるようになったのは比較的近年である。戦争をめぐる罪責意識は「中国革命」への共鳴に贖罪の糸口を見だし、さらには「台湾解放」という中国共産党の方針を相対化することを困難としてきたように思われる。

第3に、本来ならば戦後に日本の植民地支配を告発すべきだった人びとが、国民党政権により口



## 台湾（台北）における交通の変化

### —捷運と高鉄—

中原裕美子（九州産業大学）

を塞がれた、という事情がある。例えば、日本統治下台湾を代表する知識人のひとりだった林茂生は戦後に、「〔日本人は〕一般大衆の生活水準を改善した。しかし、わたしたちが自分自身を管理し、政治に参加することを意図的に防いだ」と息子林宗義に語った（拙著『世界史のなかの台湾植民地支配』岩波書店、2015年）。植民地支配の本質を射貫いた批判である。だが、このあとすぐ二・二八事件のさなかに国民党特務に連れ去られて処刑された。脱植民地化という課題が国民党により「代行」されたために、直接的な告発の声はかき消された。朝鮮植民地支配については朴慶植のような在日朝鮮人が歴史研究を通じて告発したのと相似した事態は、台湾の場合には起こりにくかった。

第4に、通信の途絶という事態も影響しているだろう。そのことに気づかされたのは、1950年代に平凡社が世界中の子どもの作文を集めて出版した、『世界の子ども』（全15巻）にかかわる共同研究においてである。平凡社編集部は、台湾の作文を集める方針を示す文書で、「かつて日本が自分達の利益の為に作った植民地のしくみはそのままあらためられず、島民は相かわらず、苦しい生活をつづけなくてはならない状態である」と鋭くも記していた。だが、こうした方針に見合う作文は集められなかった。当時台湾では白色テロの嵐が吹き荒れており、通信の自由はなかったからである。

そのことを察知した編集部は、エスペラントを用いて民間ベースで作文を集める方針を早々に放棄し、政府機関たる教育部を通じて作文を収集した。当時の台湾には戦前以来のエスペランティストで社会主義者である連温卿が存命だったが、連温卿を介して作文が収集されることはなかった（拙編『生活綴方で編む「戦後史」』岩波書店、2020年）。岸信介と蒋介石のように権力者同士は通じていたものの、それぞれの地域の反体制的な人びとが通信を介してヨコにつながる可能性は乏しかった。

第1・第2の要因が、主に日本社会に内在する要因であるのに対して、第3・第4の要因は、主に国民党政権に由来する要因である。これらの要因が相互にもたれ合い支え合いながら、台湾を視界の外側に置き去りにしてきたのではないか。今日の台湾認識の変化を一過性のものに終わらせないためには、そのもたれ合いの歴史をしっかりと省みる必要がある。

私は1990年代に日本の電機メーカーのICT機器開発部門に勤務し、当時世界市場に出てきたばかりの台湾のICT企業数社と取引していた。その中で、台湾のICT産業や、国境を越える人材移動に興味を持ち、企業を退職して大学院に進み、研究者になった。

ディープな台湾をご存じの方ばかりの台湾学会のニュースレターに寄稿させて頂くのは甚だ恐縮であるが、台湾との縁ができて以降の30年近くの間に感じた、台湾（台北）の交通の変化について、小文を認めさせて頂こうと思う。

まず、台北の捷運（MRT）である。

1990年代に初めて、出張で台北に降り立った。当時はまだ捷運がなかったため、取引先企業への訪問は、基本タクシー移動だった。

しかし、捷運建設工事のために車線の1つが常にふさがっているような状態で、それがバイクの通行を妨げ、さらに交通渋滞を招いていた。その工事と交通渋滞のために街の中心は常に土埃が舞い、少し外を歩いて汗をハンカチで拭くと、白いハンカチがべっとりと黒くなるくらいだった。

1996年以降順次、捷運の各路線が開通し、長らく車線をふさいでいた捷運の建設工事がなくなったことと、捷運の利用者が増えてバイクが減ったことで、交通渋滞はかなりの程度緩和され、街の空気もずいぶんきれいになった。

また、長らく桃園空港と台北市を結ぶ鉄道がなく、アジアの他都市での国際学会に出席した際の他国の研究者との雑談で、「アジアの主だった都市の中で、国際空港と市街が鉄道でつながっていないのは台北だけだよ」という不名誉な話題が出るほどだったが、2017年に桃園捷運機場線が開通し、桃園空港と台北市の間を、交通渋滞のことを考えずに移動できることになった。

私は企業勤務時に、出張で、台北市郊外の林口の山中にあった取引先企業A社の工場を時々訪れていた。当時は台北からの交通手段が乏しく、A社の担当者に描いてもらった手描きの地図をタクシーに見せて乗るか（山の中にあつたので、住所を伝えるだけでは、台北のタクシー運転手は行き着けなかったため、わが社では、その手描き地図のコピーは、林口出張者の必携とされていた）、敦化北路にあったA社の本社から林口の工場までの企業内連絡バスぐらいしかなかった。なので2017年、開通したばかりの、桃園空港から台北市まで

の捷運機場線に初めて乗り、「林口」という駅に停まった時は、「あんなに行きにくいところだった林口の山中に、鉄道が繋がった！」と秘かな感動を覚えた。

余談であるが、ある日、そのA社の本社から林口の工場までの企業内連絡バス（マイクロバス）で、私と直接仕事上の関係はなかったが、A社の中で切れ者と評判だった、アメリカからの帰国者B氏と乗り合わせた。1990年代の台湾のICT企業は、アメリカからの帰国者が、持ち帰った技術・ビジネススタイル・英語力等で圧倒的な存在感を示し、それら企業のグローバル市場へのめざましい台頭を牽引していたのだが、このB氏は、A社に複数いた帰国者の中でもとりわけ一目置かれる存在であった。

「すごい人と乗り合わせてしまった、マズい…」と思うも後の祭り、林口の工場に到着するまでの1時間強、B氏と（英語で）世間話をする羽目になったのだが、アメリカからの帰国者の中でもとりわけ速いB氏の英語のスピードや、キレイの頭の回転、アメリカでビジネスをしていた人特有のウィットに、留学経験もなく日本企業での浅いビジネス経験しかなかった20代の私は付いていくのが必死で、商談ではない単なる世間話なのに商談以上に頭をフル回転させねばならなかった（が、それでもB氏の会話の洒脱さには到底叶わず、脱帽するばかりであった）。

バスが林口の山に差し掛かりもうすぐ工場に着く、という段になって、その1時間強の会話の間に把握したB氏の口癖を逆手に取った（我ながら）うまい言い回しを思いつき、それをを用いてB氏に言い返すと、それまで終始クールでほとんど表情を変えなかったB氏が、「やられた」という表情で口元を緩めたのを見て、私は心の中でガッツポーズしたのだった。当時もし林口まで鉄道が通じていたら、この企業内連絡バスに乗ることもなかったかもしれない、仕事上の付き合いのなかった他部署のビジネスマンと長時間の世間話をする機会もなかっただろう。そのお陰で、仕事以外の面でも帰国者のキレイの頭脳の一部に触れることができたのは、研究者となったのちにこのような帰国者も研究対象とする上で、貴重な体験であったと言えるかもしれない。

次に、台湾高鐵（台湾新幹線）である。

私の弟は高鐵の線路の設計のため日本から派遣され、最も南の左營界隈の工区を担当していたので、長く高雄に駐在していた（きょうだい揃って台湾に縁があるのも、不思議な巡り合わせである）。

ある日、台北で資料収集を終えた後に、高雄に

駐在していた弟を訪ねようと松山空港に向かうバスの中で、隣の席に乗り合わせた阿姨から、「あんた、どこに行くの？」と話しかけられた。「高雄で新幹線の線路を作っている弟に会いに、高雄に行くんです」と答えると、阿姨は「へー、新幹線！台湾のためにありがとう」と驚いて下さる。そして近くの座席に座っている別の阿姨（彼女らは知り合いではない）に、「ねえ、聞いた？この人の弟さん、高雄で新幹線の線路を作ってくれてるんだって！」とおっしゃり、その別の阿姨も、「へー！台湾のためにありがとうねー」と言って下さった。いかに高鐵が台湾の人々に待たれているかを、実感した出来事であった。

その後、2007年に台湾高鐵が開業し、台北—高雄間が1時間半で結ばれるようになった。

その松山空港は、高鐵開通前は、国内線がひっきりなしに飛ぶ、きわめて離発着の多い空港だった。台北の友人たちに「台北から高雄に行くので国内線のフライトを予約したい」というと、皆に声を揃えて、「台北—高雄間のフライトなど、予約する必要はない」「電車と同じような感覚で、空港に着いた時にある便に乗ればいいのだ」と笑われたものだった。

しかし、その国内線を担っていた遠東航空等は、台湾高鐵の開通とともに、急速に財務状況が悪化し、多くが運航停止に追い込まれた。

その後台湾高鐵が、すっかり台湾の人々の足として定着したことは、皆さんもご存じの通りである。

## 台湾東海岸における変化 —観光化の中で—

西村一之（日本女子大学）

1990年代のはじめ、文化人類学を専攻していた私は、大学院進学後、調査地探しをする必要に迫られていた。フィリピン、インドネシア、中国などいくつかの候補があり、その中に台湾が含まれていた。

1993年夏、知り合い一人いない台湾に足を運んだ。事前に海辺に行くなら東海岸が良いとある研究者に言われていたので、自強号で7時間ほどかけて台北から台東へ向かった。さらにバスに乗り、東海岸を北上、ところどころ掘り返された工事の道や狭く古い道を進んだ。

当時東海岸一帯は観光風景特区に指定され、インフラ整備が行われていた。観光バスを再利用しているらしい車輛は、荒れた路面に構うことなくスピードを出し走った。終点でバスを降りた。到着したのは小さな港町だった。漁港には変わった形の船が並んでいた。カジキの突棒漁を行う漁船だった。台東花蓮間のバス路線の中継地点であるその港町に調査地を決めた。

町では、日が傾いてくると、家の前の道端にプラスチック製のイスを出して座り夕涼みする人々がたくさんいた。そして住民は、夕飯を摂ってから三々五々連れ立って親戚や友人の家を周り、イスに座って戸外でのおしゃべりに興じるのが日常の風景だった。私も誘われるままついて歩き、家々で台湾茶をごちそうになり、知り合いがどんどん増えていった。この頃会う人毎に「ここに友達はあるか」と聞かれた。それがいかに大事なことが滞在を繰り返す中で段々と分かってきた。

そして、1996年夏から14か月ほど、調査の為此の町に暮らした。夕方から友人知人宅を回る町の日常には、この時非常に助けられた。一人で暮らす私を気にかけ、毎日のように誰かが滞在先であるカトリック教会の宿舎に顔を出す。夕飯を食べに来よう誘ってくれる人、食べるものを持って来る人、鶏脚や釈迦頭もかれらを通して覚えた。もちろん、調査の相手も友人のネットワークで見つかり広がっていった。

町はすでに人口の流出が激しく、その高齢化も進んでいた。特に先住民アミの集落は歩く人もまばらだった。当時アミの収穫祭は7日間ほどの期間があった。この収穫祭を観光の誘客に用いようと、町役場では祭りを挙げる集落に補助金を出していた。見学する観光客の姿もあったが、見ることが出来る日は決まっていて、写真撮影には現金の

支払いが求められた。また、アミ住民の多くが収穫祭などいわゆる伝統文化に否定的なキリスト教宗派の信者で、全てのアミが祭りに参加しているわけではなかった。

1997年冬に帰国してからも、春と夏には町で1か月程度の滞在を続けた。この間、収穫祭の期間は週休二日制に合わせて週末の二日間となり、規模が縮小、参加人数も次第に減っていった。だが一方で、収穫祭は文化活動であって宗教活動ではないという理由から、それまで否定的な態度だった宗派の信者の一部が収穫祭に参加するようになった。これは、観光化と民族意識の高まりの中で生まれた変化と考えることが出来る。

長期調査を始めた時、季節が変わり冬になって北風が吹き出すと同時に、魚市場にはたくさんのカジキが並び出した。だが、昨今は海洋環境の変化の影響もあるのか、魚市場に並ぶカジキの数は随分と減り、カジキ漁を専らに行う漁師も漁船も少なくなった。その船に乗っている船員たちは少し前までは中国から、そしてインドネシアやベトナムから来る人が多くなった。だが、日本植民統治期に由来するこの漁法は、町の伝統的漁法と位置づけられ、町を代表するものとして観光の場で新たな用途が生まれている。

このところ筆者が町に滞在できる時間は短く、急激に増えた「民宿」に泊まることもある。道路が整備され、自家用車を使った観光客が、週末になると町に集まってくる。台湾におけるツーリズムの浸透が、内外の観光客をこの地にもたらしめている。民宿オーナーの中には北部、西部からやって来た移住者や、都市部からUターンした住民がいる。相変わらず住民人口は減り続けているが、観光客のような短期間滞在者や、町外からの移住者、そして台湾の外から来て働く労働者を始めたとした、長期滞在者の存在感が高まっている。

1990年代初め調査を始めたころは、「なんでこんなところに来たんだ、調べるなら西部の方がいい。ここには歴史も文化もない」と言われ続けた。だが、町史刊行が計画され、そのための資料収集と調査が進められた2000年ころから、「調べていることを、話して聞かせてほしい」という人が現れた。その後、町の歴史や盛んだった漁業について調べる住民団体が生まれ、それらを学んで「観光ガイド」となる住民が活動を始めた。台湾でもその名を知る人が稀な小さな港町だが、町は観光化の影響を受け大きく変わっている。観光化は景観のみならず人々の町に対する向き合い方にも変化を与えている。

さて、この町での調査を始めたころ見られた、夕方各家の前でプラスチック椅子に座り話す人々

の姿を、今はほとんど見かけることはない。町の住民たちは SNS を通してお互いの近況を知り、その通話機能やチャット機能で「おしゃべり」に興じている。知人に調査の相談をすると、それを使って友人ネットワークをたどりあつという間にインタビュー相手を紹介してくれる。日本にいる時の私との通信手段も当初は国際郵便だったが、電子メールを経て、やはり SNS になった。

ところで 2020 年末、SNS アプリの通話機能を使いある住民に連絡を取ったところ、東京のコロナ感染状況を知る 90 代のその家の男性が、家人からスマホを受け取り、「むやみに外に出てはいけませんよ」と注意を促してくれた。人々をつなぐ手段は大きく変わっているが、その底に流れているものに大きな変化はないようだ。

## 台湾の変化の窓

### —タクシー—

伊藤信悟（国際経済研究所）

「雨降りの休日前の夕方の移動スケジュールには特に気をつけろ」。私が最初に台湾を訪れた 1996 年当時、こうしたアドバイスを台北駐在員などからよく受けた。

当時の台北には、「捷運」(MRT) は 1996 年 3 月に開業した木柵線しかなく、地理も中国語もよくわからない外国人にとっては、バスに乗ることも困難だった。バス専用レーンも整備されていなかったため、バスに乗ったからといってスムーズに移動できるわけでもなかった。車をチャーターできるだけの出張費もなく、タクシーに頼る他なかった。しかし、そんな交通事情ゆえ、平時でもタクシーを捕まえることは簡単ではなかった。いわんや「雨降りの休日前の夕方」をや、である。

それゆえ、タクシーがきれいかどうかを選んである余裕はなかった。運よく捕まえられた車に乗るしかなかった。ある日インタビュー終了後、ようやく捕まえられたタクシーは、シャシーとボディが外れそうになっているのをビニールひもでくくりつけた車だった。しかし、急がねばならず、それに乗ることにしたが、乗車後サスペンションも壊れていることがわかった。カーブでは路面とシャシーの擦れる音がした。いくら当時でもそんなことはないだろうと思う方もいらっしゃるだろうが、本当の話である。

しかし、2000 年代に入ると、タクシーの需給も、きれいさも、サービスも急速に変わっていったように思う。

まずもって、タクシーが捕まえやすくなった。その原因は、タクシーの台数が増えたからではないようだ。統計で確認すると、タクシーの台数は減少している。他の交通手段の整備によるタクシー需要の減少が主因のようだ。労働力不足から労働力過剰時代に入り、次の職が見つかるまでタクシー運転手をするという人が多く供給されたことも、タクシーの需給緩和の一因かもしれない。とりわけ 2000 年代は、タクシー運転手の約 4 分の 1 がそうした理由でタクシーのハンドルを握っていたことが、台湾交通部の調査でわかっている。

タクシーのきれいさ、サービスの改善も進んだ。自動車自体の進化や台湾の所得水準の向上もさることながら、時間空車率の高まりによる競争の激化、また、個人タクシーや「計程車運輸合作社」(タクシー運転手が組成した共同運営組織) の車が減り、資金力を備えたタクシー会社が勢力を拡

## 変わっていく台湾と それを見ていた私のこと

胎中千鶴（目白大学）

大したことが、タクシーの品質・サービスの改善が進んだ大きな要因だろう。GPSを備え、運転手がみな制服をきているタクシー会社が登場した時は、時代の変化を強く感じたものだ。運転の荒さも以前と比べれば改善しているのではないだろうか。

規制緩和も進んだ。セダンだけでなく、さまざまな車種をタクシーとして使えるようになり、スーツケースの積み下ろしなどが便利になった。また、2017年には台湾版Uberとも称される「多元化タクシー」の営業が始まり、黄色以外のタクシーもお目見えしている。ITの活用も進んでいる。配車アプリがその典型例だ。配車アプリの相互利用で日台が連携する事例もみられる。

こうしたタクシー自体の変化だけでなく、タクシー運転手との会話から台湾の変化を感じてきた方も多いのではないだろうか。日本でもタクシー運転手の景況感が、内閣府の「景気ウォッチャー調査」にも組み込まれているように、台湾経済の今を感じるために、タクシーに乗るたびに景況感を尋ねるようにしてきた。

2000年代から2010年代初頭にかけての時期は、高成長期が終わったことに対する政府への恨み節や、台湾経済への悲観論を耳にすることが多かった。2010年代半ばには、中国の環境汚染や経営環境の悪化で台湾に戻ってきた、あるいは、親類・知人が台湾に戻ってきたという話を、タクシー運転手がしばしば語ってくれた。近年では、決してタクシー業界の経営環境が大きく改善しているわけではないが、経済の成熟化による安定成長を所与として受け止めているタクシー運転手が増えていくように感じる。

他方で、変わらぬところもある。近年でも私が日本人だとわかると、そっと日本人歌手の歌に変えてくれるタクシー運転手に出会うことがある。ラジオから流れてくる日本人歌手の歌や日本のニュースをきっかけに話が弾むことも多い。台湾の内政や国際情勢について質問を投げかけた結果、熱い議論にお付き合いするはめになることも少なくない。自業自得なのだが。

新型コロナのせいで台湾に行けない日が続いている。タクシー運転手の方々は今の台湾に何を感じ、どう語っているのだろうか。かれらの話を聞き、コロナ後の台湾の変化を肌身で感じられる日が一日も早く訪れることを心から祈っている。

台湾史研究を始めたきっかけは？とよく聞かれるので、「80年代の終わりに侯孝賢の映画を観て感激し、本格的に学びたいと思ったからです」と答えることにしている。だいぶ端折ってはいるが本当の話で、ほどなくして33才の私は立教の文学部に編入学したのだった。

だが振り返ってみると、あのときは単に「何かを学びたい」がために台湾史を選んだのだと思う。大学を卒業して高校の社会科教諭になったが、卒論すら書かずに学部を終えたことにコンプレックスを抱いていた。テーマを決めて文献を読み、検証、考察するという作業を一度も経験せず教壇に立ってよいはずはない。なんでもいから打ち込める研究対象を見つけて論文を書きたい。そういう気持ちが強かったのだろう。侯孝賢の作品を観たとき、確かに雷に打たれたような衝撃を受けたのだが、それは映画の素晴らしさだけでなく、「ついに学ぶべき対象が見つかった」という喜びだったのかもしれない。

そのため、史学科で卒論を書いて修士課程に上がり、日本仏教の植民地布教に関する修論を提出すると、なんだか「ひと仕事終了」気分になった。当時は高校の非常勤講師をしており、専任に戻りたくて就職活動もしたが、結局うまくいかなかった。

その一方で台湾史への関心も捨て難く、「ドクターもあついな」と博士課程に進んだ。すると少し調子が出たので「留学もあついな」などと生意気にもある企業のスカラシップに応募、1年間の研究留学が実現したのである。1999年、40才のときだった。

留学自体は夢のような出来事で、今もその企業には足を向けて寝ていない。ありがたく嬉しくて、4月に台北に到着したときも、まだフワフワしていた。よーし、いっぱい研究するぞ！もう40だけど、まだ博士2年だけど、そんなこと気にしない気にしない！

…というわけにはいかなかった。すっかり忘れていたが、私はすでに老眼だった。史料を読むとすぐ疲れる。体力も気力も人並み以下だ。博論執筆なんてどこの世界線の話だろう。

最大の弱点は語学で、現地に住んでも一向に上達しなかった。言葉が苦手だと人脈も広がらない。親しい友人と会うのは楽しかったが、あとは図書館とアパートを往復し、街をぶらぶらするだけ。

部屋でお菓子を食べながら雑誌を読んでテレビを見ているうちに眠くなり、目が覚めたら外はとっぷり日が暮れて…という自己嫌悪の無限ループである。

中央研究院の某所には共同研究室があてがわれていたものの、恐れ多くて1年間で3回しか行かなかった。2回目は建物のなかで道に迷い、研究室にたどり着けなかった。今思い出しても涙が華厳の滝のように流れ落ちる。

だからあのころは、日本から来た若手研究者たちが眩しくて困った。学歴キラキラ、言葉はペラペラの人ばかり。「留学もありかな」的な自分とはそもそも能力や覚悟が違うのか…。研究室にたどり着けないのは身体ではなく、心のほうだったのかもしれない。

どんよりと数か月が過ぎ、その日が来た。9月21日午前1時47分、中部の南投県を震源とするマグニチュード7.3の直下型地震が発生したのだ。死者2400人余、負傷者1万1000人以上、のちに「九二一大地震」「集集地震」と呼ばれる未曾有の大災害である。

私はたまたま一時帰国していて、21日の夕方、台北に戻った。市内は震度5弱、アパートの部屋には棚から落ちた食器の破片が散乱し、停電でテレビは見られない。あわててつけたラジオから刻々と流れる被害状況を聴くうちに、足が震え出したのを憶えている。

停電はその後断続的に起こり、真っ暗で蒸し暑い夜を幾晩も過ごした。外を眺めると、街並みは漆黒の闇に埋もれている。私は怖かった。不測の事態が起きないだろうか。台湾はどうなってしまおうのか。

しかし、人々は案外平静を保って暮らしていた。スーパーでは、暗い店内で店員が懐中電灯を片手に客を手際よくさばいている。客のほうも特に買占めに走るわけでもなく、必要最小限の商品を選んで静かにレジに並んでいる。大通りでは信号が消えていたが、ドライバーは自己判断で上手に運転し、大きな交通トラブルが発生している様子もない。

台湾政府の被災地対応も迅速だった。李登輝総統は午前2時に救援指揮センター設置を指示、夜明けを待ってヘリで南投県に直行した。さらに憲法に基づく総統の非常時大権「緊急命令」を発布、現行法の規制を受けずに行政措置を講じて民心の安定を図った。初期救援活動には、軍や憲兵など約13万人が出動したほか、仏教系NGO団体など民間ボランティアも驚異的な機動力を発揮して存在感を示した。それ以外にも一般の多くの人々が被

災地支援に向かい、高額な義援金も相次いだという。

私はというと、ひたすらニュースを見続け、新聞や雑誌を片端から読んだ。10月には日本から来た友人とともに支援を兼ねて被災地に足を運んだりもした。

そのころから、台湾社会のあるイメージが脳裏に浮かぶようになった。それは、強い意志をもつ巨大な有機体が、震災という難敵と闘うために、自在に形を変えながら相手を飲み込もうとする姿である。冷静かつ迅速な対応に努める政府、さまざまな方法で助け合いの精神を発露させる多数の市民。誰もが震災を自分ごととしてとらえ、互いに連携しながら1つの大きな力を生み出している。その姿はまるで、民主化を成し遂げた台湾社会がようやく「かたち」として立ち現れたかのようなだった。そしてそのかたちの輪郭は、翌年3月の総統選挙でついに像を結ぶことになる。

留学を終えるころ、私にとって台湾は単なる研究対象というより、もっと「特別な場所」になっていた。史料の向こうに見えるのは過去の台湾だけではなく、今ここにある台湾へとつながる一筋の道なのだ気づいたからだ。目の前のこの強くてカッコいい社会とずっと関わるためには、台湾史研究を続けていくしかない。博論や就職など、長く困難な道を選び選んだことは承知していたが、私の覚悟はこのとき確かに決まったと思う。

あれから21年。研究者としてのダメダメさや力不足は相変わらずだが、やっと道に迷うことがなくなった今日このごろである。

## 私家版「食べる台湾」

### —変化に注目して—

星純子（茨城大学）

台湾に行って研究せずとも誰もがお世話になるのが、食である。「なんだ、第38号ニューズレター特集『食べる台湾』に引き続きまた食ネタか」と思われるかもしれないが、今回は食の変化に焦点を当てるといってご容赦いただきたい。というのも、わたしが知る20年ほどの範囲で、台湾の食とそれをめぐる生産および消費形態、習慣、価格（総じて飲食環境と呼んでおく）は劇的に変化したと思われるからだ。この文では、以下それらがどのように変化したのかを気ままに書いていきたい。

第一に、この20年で台湾の食べ物、特に農産物のパッケージはかなり洗練された。持ち帰りのスープやジュースがプラスチックカップではなく、直接透明のビニール袋に入れられていた時代、贈答品（礼盒）やお土産は、ゴツゴツした赤系の箱の中に手で切りにくい（もしくは手で切ると静電気が起こる）プラスチックの大袋包装が多かったように思う。

それがこの20年で、土産物の箱は彩度の高い色やデザイン性の高い字体が採用され、スーパーで売られる各種の食べ物も、目を引くパッケージが多くみられるようになった。そして以前、「日本の土産は包装が過剰で高い」とぼやいていた台湾人が、台湾国内で日本以上に分厚い箱や凝った包装の高価な食べ物を喜んで買い、それらを競ってSNSで投稿して「いいね！」数を稼いでいるように見える。パッケージが洗練されたとともに、それらを受け入れるという消費習慣も形成されていることがうかがえる。

この変化はとくに農産物とその加工品において顕著である。農業委員会や客家委員会が、地方産業のパッケージ精緻化による付加価値形成に、補助金を出して農会や生産者を支え、さらに消費者のニーズにも応えている。

第二に、有機農産物や新しい作物・品種など今まで作られなかった農産物が出現し、安全・安心な「国産農産物」として人気を博しているとともに、輸入農産品も評価されていることである。例えばコーヒーの産地で当初名を馳せたのは雲林県古坑だが、その産地は屏東、台南、南投にも拡大している。

台湾産コーヒーは、中南米、東南アジア、アフリカなどのコーヒー栽培地帯から比べれば後発だが、「国産」という付加価値を武器に内需を獲得し、

すっきり定着した。個人的には栽培技術や加工技術が途上かなと思いつつ、多様な商品や観光農園の設立など生産者や消費者の熱気には驚かされる。1970年代の高雄県美濃鎮で、農会が葉タバコに代わる経済作物として農民にコーヒー栽培を奨励したが、栽培技術も販路も指導できず、栽培が大失敗に終わって農家の借金だけが残し、農民の不信感を買った、などというエピソードからは隔世の感がある。

同様の経済作物で、南部ではおなじみのカカオも、栽培技術のみならず加工技術およびパッケージが発達して、多様な商品が開発され、最近では日本でも下高井戸のMEILIなどで入手可能である。ここにも人口が減少する台湾にあって、国産農産物の付加価値上昇や農産物の輸出は至上命題であり、国策の力が入っているのは、前述のパッケージと同様である。

当然それとトレードオフとなる、農産物の輸入もさかんで、例えば農会関係者や農業関係の研究に従事する人々の中では、中秋節に岡山県産のシャインマスカット、旧正月に青森県産のふじりんごが贈答品として流通している。これは日本側の農産物輸出政策、台湾人の日本のルーラルツーリズム定着による日本産農産物の認知度向上、またそれを積極的に「インバウンド観光客」として誘致する日本の自治体とも対応する。

総じていえば、「国産」に従来にはない付加価値がつけられたり、一方で日本に旅行に行った経験のある台湾人が日本産の果物を楽しんだり、または観光に行って「体験して食べるもの」に価値を見出したりと、農産物の品質は多様化しているといえる。

第三に、あまり台湾化しない味の外国料理を食べる機会が増えている、と感じる。第38号ニューズレターで挙げられていた外省人の中国料理はともかく、台湾は外国料理店が少なく、あっても味が台湾化していると思っていた。その気持ちは本学会ホームページにアーカイブされた佐藤幸人会員の「台北便り」第19回「甘い台湾」（2003年3月13日）で、台湾味のパターン化や外食産業の台湾化が指摘されていたことから裏付けられたのだが、いつの間にか店数は少ないながらも、固ゆでの甘くないパスタが出現したり、外国人配偶者、移民（移民支援団体は彼・彼女らを「新住民」と呼ぶ）が開業した東南アジア料理が出現して若者の人気を博したりと、食の外側のみならず中身も多元化していた。

これら飲食環境の変化を見て感じるのは、台湾における消費社会の深化、農村のポスト生産主義、そしてさらなる多元社会化である。資本主義の論

## 台湾の民主主義が大きく変化したとき —ひまわり学生運動から参加型ガバナンスへ—

田島真弓（専修大学）

理にもとづいて商品の差別化が限りなく進行し、消費が生活のニーズではなく、コミュニケーションの一部として機能する消費社会にあって、パッケージの精緻化やきれいな店の内装は大きな役割を果たし、SNSの発達もそのコミュニケーションを助けている。それが消費側の動向であるなら、生産側の農村においては、農産物そのもの以外に多様な人々が多様な意味付けをする時代であり、パッケージの他に体験などの観光要素や「安全・安心」が、農村の付加価値として大きな存在感を放っている。そして農村こそ多くの「新住民」が暮らす地域であり、台湾の社会は飲食文化の多元化が進行している。

しかしそうこうしているうちに、再び安いパッケージの屋台や夜市が「台湾らしい」と、海外の観光客からも台湾人からも再評価されたり、キッチンプラスチックの買い物カゴ（台湾語でいう加薦仔 ka-tsi-á）に入った食べ物が人気を博したりと、台湾の変化はめまぐるしい。現在コロナ禍で現地の食べ物を楽しめないのが残念だが、願わくばその変化を今後も見届けていきたい。

コロナウィルスの防疫対策の失敗で、日本政府への信頼感が著しく失われつつある日本。一方、コロナウィルス流行の早期に水際対策を成功させ、国内での感染者の増加を食い止めた台湾。台湾では感染症の脅威に対して国民と政府が互いに協力し、ゆるぎない信頼関係が構築されているように見える。果たしてこのような台湾国民の政府への強い信頼感はいつ、どのようにして醸成されたのだろうか？

2013年11月30日、当時、花蓮県の国立東華大学社会学系で教鞭をとっていた私は、研究発表を行う大学院生らと共に、台北市の国立政治大学で開催されていた、台湾社会学会大会に参加していた。台湾の社会学者や関連の研究を行う研究者、学生等が一同に会するこの大会において、初日に注目を集めたのが、台湾の社会学を代表する重鎮で、ソーシャル・ネットワーク研究の第一人者、熊瑞梅教授（国立政治大学社会学系）の基調講演であった。

熊教授は台湾、日本、韓国及び中国社会における地域社会の発展、人々のボランティア組織への参加、国民の政府への信頼度を比較した研究成果を発表したが、その内容は満座の研究者たちを驚愕させた。民主主義社会では、非政府や非営利団体等各種のボランティア組織への参加が市民社会の発展を示す重要なバロメーターとなっている。しかし、熊教授の研究結果によれば、台湾は伝統的な宗教団体への参加は活発だが、ボランティア組織への参加率が4ヶ国で最下位であった。さらに、日本との比較で興味深いのは、台湾では個人的な人間関係（親族や親しい友達、学校の先輩や同級生、職場の同僚等）に絶大な信頼を置いているが、政府に対する信頼度（制度的信頼）は著しく低く、逆に日本では個人的な人間関係に対する信頼度は低いが、政府に対する信頼度は4ヶ国中トップであった。

このように、2013年当時の台湾の社会は、血縁、地縁等の人間関係や土着の民間宗教団体を中心とする、人的ネットワークが重要な役割を占めていて、政府に対する信頼度は著しく低かったのである。身内や気心の知れた友人、長年の付き合いのある学生時代の仲間や、職場での濃密な人間関係が重要視される台湾社会では、政府に対する根強い不信感があっても、信頼感を醸成することなど到底考えられなかった。



しかし、そのような台湾の国民と政府とのネガティブな硬直的關係性を大きく変える事件が起きた。それが翌年 2014 年 3 月に起こった、ひまわり学生運動である。

この時期には、2010 年末に中東各国で活発化した「アラブの春」、さらに 2011 年のウォール街デモ等、世界各地で深刻な格差社会に不満を訴える人々が集結し、大規模な反政府デモを展開していた。折しも中国政府のグローバル社会への影響力が拡大し、台湾では、国民党政府や一部の大企業が中国と急接近する中で、中国の強大な経済力に脅威を感じた学生や一般市民らが反政府デモを展開、ひまわり学生運動は学生のみならず、国民全体の支持を集めた。

ここで一つの疑問が浮かび上がる。それは、アメリカの政治学者、ラッセル・J・ダルトンも指摘するように、高度に発展した民主主義国家では、国民の教育水準も向上し、政府の政策に対して懐疑的かつ「批判的 (critical)」な国民が増加する。すなわち、論理的かつ客観的に政策の有効性を評価し批判できる国民が増えると、国民は政府の失策を敏感に察知し、政府に対する信頼度が著しく下落するという問題だ。この指摘が正しいとすれば、ひまわり学生運動は批判的思考を展開する学生や一般市民による政府への信頼度が下落し、政府との関係性はますますネガティブな方向性へと向かうのではないだろうか。

しかし、幸いなことにその予測は大きく外れた。ひまわり学生運動が起こってから、台湾の人々は政府の政策決定について強く関心を持つようになったからだ。

まず若者たちが大きく変わった。仕事や学業の合間に NGO (非政府組織) や NPO (非営利組織) でボランティア活動に参加して、地域社会の発展に貢献したり、社会問題を営利事業で解決するソーシャル・ビジネスのクラウドファンディングに少額の資金を提供したりして、積極的に台湾社会の変革乗り出した。ソーシャル・ビジネスやソーシャル・イノベーション等、台湾の社会を変革するための斬新な試みに若者たちが意欲的に取り組み始めたのも、ちょうどこの時期からである。

ひまわり学生運動以前の台湾の民主主義は、選挙に投票することで有権者が政府に働きかけるシステムだったが、投票だけでは多数決による働きかけで終わってしまう。ひまわり学生運動以降の台湾の民主主義は、多数決民主主義から脱却し、学生や一般市民が政府の政策決定に意欲的に参加するという、「参加型デモクラシー」に転換を果たしたのである。ボランティア組織に参加したり、ソーシャル・ビジネスを支援したりすること

で、政府の政策を国民の立場から再検討し、政府の政策を修正しながら台湾の社会問題を解決するという国民と政府のポジティブで前向きな關係性を打ち出したのである。台湾政府もまた国民と共に政策決定を行う姿勢を目指し、台北市政府等地方政府による予算審議に国民が積極的に参加できるようなプラットフォームを立ち上げた。

社会運動の研究で著名なイタリアの政治社会学者、ドナテッラ・デラ・ポルタによれば、社会運動は政策に批判的な考え方を持つ市民が参加するため、体制に対する挑戦的な行動となる。しかし、同時に硬直的な国民と政府との關係性がリセットされ、学生や市民が政治への関心を強め、政府の政策に関与し、その策定に参加することによって、ポジティブな關係性に移行する可能性が生まれる。ひまわり学生運動後の台湾社会は、それまでの多数決民主主義から、市民による「参加型ガバナンス」へと大転換を果たし、学生や市民が政府の政策に積極的に参加することによって政府との緊密な信頼關係を構築できるようになった。

コロナウィルスの防疫活動においても、台湾のデジタル担当相、唐鳳 (オードリー・タン) が指摘するように、政府と国民が共同で政策を立案し実施する「参加型ガバナンス」が重要な役割を果たした。台湾の防疫対策を統括する衛生福利部疾病管制署が制作したドキュメンタリー「我們」にも、政府と国民との強固な信頼關係が防疫対策を成功に導いた軌跡が描かれている。台湾の国民の政府への信頼度の高まりは、社会運動が民主主義の変容に決定的な役割を果たす好例として、今後も更なる検討と発展が期待されるだろう。

## 日本台湾学会活動報告

定例研究会

歴史・政治・経済部会

担当幹事：松岡格（獨協大学）

### 第147回日本台湾学会定例研究会活動内容

日時：2020年10月2日（金）21:00-22:30

場所：オンライン

\*会議の録画がリンクより視聴可能：

[https://youtu.be/N\\_d-pWpKasE](https://youtu.be/N_d-pWpKasE)

題目：The Impact of the COVID-19 Crisis on Taiwan's External Relations: Views in Japan

共催：European Association of Taiwan Studies (EATS), North American Taiwan Studies Association (NATSA) and International Journal of Taiwan Studies (IJTS), Japanese Association of Taiwan Studies (JATS)

参加人数：約60名

活動報告：

本研究会は、共催4団体が企画するオンライン会議シリーズ「ポストコロナの世界における台湾研究の未来（Future of Taiwan Studies in the Post-COVID world）」の一環として開催された。日本台湾学会としては参加の第一歩となる企画であり、日本人研究者の視点からコロナ危機が台湾の対外関係におよぼした影響について報告をし、世界中の台湾研究者と議論をしてみようという試みであった。

企画全体の趣旨としては、コロナ危機の影響を既存の現象を加速させた「触媒（catalyst）」と捉え、中台関係、米台関係、日台関係の視点から、その働きについて分析し、今後の台湾の対外関係について展望を試みた。

第1報告者として、松田康博（東京大学）が中台関係について報告した。台湾がコロナ対策に成功し、コロナ危機が米中対立を促進したことによって、中国の対台湾政策は行き詰まり、中台関係がさらに緊張したことを指摘しつつも、軍事衝突が起きる可能性については冷静でなければならないとの見通しを示した。

第2報告者として、佐橋亮（東京大学）が米台関係について報告した。米国の「一つの中国」政

策が形骸化し、それに対して中国が苛立ちを強めていることを具体的に指摘した上で、日本は米中との間で、他の先進諸国とも協力しながら微妙なバランスを保とうとしていることを説明した。

第3報告者として、福田円（法政大学）が日台関係について報告した。蔡英文・安倍時期の日台関係を国際関係、二者間の協力、双方の内政要因の角度から整理し、それぞれに見られた傾向がコロナ危機を経て加速したことを指摘した。

3名の報告には、事前に寄せられたものも含めて多くの質問やコメントが出され、活発な議論が行われた。それらの中でも特に、現在の米中台関係に対する日本の立ち位置と政策については多くの質問が寄せられた。例えば、中台間の軍事的緊張の高まりや実際に軍事紛争が起きた場合に日本はどのように対応するのか、日本の新政権の対中国・台湾政策はどのようなものになるのか、日本と中国の経済関係は対台湾政策にどのように影響するのかなどの問題について議論を行った。

また、質疑応答のなかで、モデレーターの菅野敦志（名桜大学）が、沖縄と台湾の間でもマスク支援やエールの交換などの特別な交流が行われていることを紹介した。会議の終盤には、日本の学者の見解についてはなかなか知る機会がないので貴重な機会であった、日本台湾学会からのさらなる国際的な発信を楽しみにしているなどのコメントも多く寄せられ、国際的に発信し、議論することの重要性を改めて認識した機会であった。

（記録：福田円）

定例研究会

関西部会研究大会

担当幹事：澤井律之（京都光華女子大学）

第18回関西部会学術大会が昨年12月19日、土曜日の午後2時30分からキャンパスプラザ京都で開催された。コロナ対策のため、対面とリモートを併用して運営した。

プログラムは以下のとおり。

- ①台湾における移行期正義の変遷—促進転型正義委員会条例をめぐる真実と和解の政治学  
報告者：孫雲之鵬（大阪大学大学院）  
評論：山崎直也（帝京大学）
- ②日本統治期台湾の「糖米相克」仮説の検証  
報告者：中嶋航一（帝塚山大学）  
評論：平井健介（甲南大学）

③「湾生」の自分史—故郷喪失の物語

報告者：釋七月子（名古屋大学大学院）

評論：五十嵐真子（台湾史研究会）

④楊千鶴「花咲く季節」論—「新」と「旧」に彷徨う「新女性」

報告者：楊紫淇（関西大学大学院）

評論：下村作次郎（天理大学名誉教授）

①孫雲之鵬氏は、目下、台湾でホットな話題の一つである移行期正義を考察するもので、移行期正義の歴史の変遷をたどり、2017年に制定された促進転型正義条例の意義と現時点においてもっとも重要なことを考察した。

コメンテーターからは、孫論文については、肝心の促進転型正義委員会条例にあまり触れていないこと、論文全体の構成がわかりにくく、インタビュー・議事録・論者の見解の境目が不明瞭だという指摘があった。孫氏は、今は資料整理の段階で、今後の課題として受け止めると応じた。

孫氏は、この条例の意義を移行期正義の主体が民間から政府へ移ったことだと指摘しているが、民間 TRC の説明がないこと、戒厳令解除がトップダウンで行われたという指摘、台湾が紛争地域でないとする認識等へも疑問が投げかけられた。

②中嶋航一氏は、日本統治期台湾の大きな研究テーマの一つである「糖米相克」を論じた。「糖米相克」については従来、日本の独占資本主義（矢内原忠雄）、さらに日本の独占資本と民族資本の対立（涂照彦）の枠組みで捉えられてきたが、中嶋氏はデータを駆使して「糖米相克」が「多様な理由によって発生した経済的現象」であることを明らかにした。

コメンテーターからは、製糖会社の独占的取引の歴史的経過等が述べられ、疑義が呈されたが、時間的制約があり、残念ながら十分な議論が展開されなかった。

③釋七月子氏は、日本植民統治下の台湾で生まれ、戦後引き上げてきた人々、いわゆる「湾生」の自分史から、湾生の自分史の特徴、湾生と被植民者である「台湾日本語世代」との共通点、相違点の検証、さらに戦争体験の叙述の相対化を試みた。

結論として湾生には「植民者としての意識に乏しく、台湾人に対する差別感もあまり持っていない」、湾生と台湾日本語世代との共通点について「経済的に恵まれた子供時代」を過ごし、「高学歴」であること、「日本統治時代に対するノスタルジー」を抱いていること等を挙げている。

コメンテーターからは、ノスタルジーは、長い人生を経て考えたことであること、豊かで成功し

た人々がその中で懐かしんでいること、湾生の自分史が2010年代以降に話題になり始めたが、そのこととの関係等について疑問が投げかけられた。

釋氏は、湾生は特殊なグループではあるが、彼らの叙述をアーカイブとしてとらえ、今は研究途上にあるが、考察を深めたいとのことであった。

④楊紫淇氏は、日本統治時代の台湾女性作家楊千鶴を取り上げた。戦前、台湾の文学界で女性は少なく、これまであまり論じられてはいない。そこに楊報告の新しさがある。

コメンテーターからは、何を中心に論じようとしているのか。女性の近代化を論じるのか、作家論なのか、作品論なのかあいまいだとの指摘があった。さらにテキストへの検証など基本的な手続きが十分なされていないこと等の指摘があった。植民地統治時期末期に登場した楊千鶴を本格的に取り上げたことに対して、今後への期待が述べられた。

参加者数は対面 22、オンライン 11 であった。オンラインの導入によって、遠方の会員にも参加していただくことが可能になった。アフターコロナの後も、オンラインを併用し、多くの会員に開かれた学会を運営していく方針である。

また、今回は岡崎滋樹会員、台湾史研究会運営委員の面々の奮闘によって開催に漕ぎ着くことができた。関西西部会係として感謝申し上げたい。懇親会は、残念ではあるが、行わなかった。

## 学会運営関連報告

担当理事：川上桃子（アジア経済研究所）

### 第11期理事会

#### 第5回常任理事会 議事録（抄）

日時：2020年12月6日（日）13：00—17：00

場所：Zoomによるオンライン会議

出席：赤松美和子、家永真幸、大東和重、上水流久彦、川上桃子、北波道子、洪郁如、菅野敦志、富田哲、松田康博、三澤真美恵、山崎直也（以上、常任理事）

やまだあつし（第23回学術大会実行委員長）

主宰：松田康博理事長

書記：平井新

## 報告

### 1. 理事長・事務局

#### (1) 松田理事長

台湾協会主催の「交礼台湾の会」への参加、台湾文学学会の『想像 2010 年代台湾文学史』: 2020 台湾文学学会年度学術研討会」への参加について報告がなされた。

常任理事の持ち回り審議を経て、地域研究学会連絡協議会 (JCASA) の「日本学術会議第 25 期新規会員任命に関する緊急声明」に理事長名で賛同を表明したこと、同じく人文・社会科学系学協会の「共同声明」に賛同を表明したことについて報告がなされた。

#### (2) 川上総務担当理事

特になし。

### 2. 各業務担当

#### (1) 川上総務担当理事

① 第 12 期理事選挙の準備状況について報告がなされた。② 日本台湾学会賞候補の推薦依頼についての報告がなされた。③ 小笠原欣幸会員から、学会賞の副賞として寄付 (15 万円) のお申し出をいただいたことが報告された。

#### (2) 山崎会計財務担当理事

① 会費納入状況について報告がなされた。② 第 11 期第 4 回常任理事会以後の主な会計の動きについて報告がなされた。対外発信強化プロジェクトの一部として、台北駐日経済文化代表処から助成を受けた旨、報告された。

#### (3) 福田広報担当理事 (川上理事による代理報告)

今井幹事からの HP 業務の引き継ぎに関する報告が行われた。

#### (4) 大東ニュースレター担当理事

ニュースレター 40 号の編集状況について報告がなされた。

#### (5) 上水流編集委員長

『日本台湾学会報』(第 23 号) の投稿状況について報告がなされた。

#### (6) 富田企画委員長

第 23 回学術大会の応募、審査状況について報告がなされた。

#### (7) 菅野国際交流担当理事

① 対外発信強化プロジェクトの一環として、台湾研究の国際誌に学会賞受賞作を推薦し、掲載する件について報告がなされた。② グローバル台湾研究サロンの開催について報告された。

#### (8) 洪文献目録担当理事

「戦後日本における台湾関係文献目録」について報告がなされた。2020 年 12 月 6 日現在の総レコード数は 18,499 件。

#### (9) 松岡定例研究会担当理事 (松田理事長による代理報告)

第 147 回定例研究会として、IJTS 等との共催で英語セミナー (The Impact of the COVID-19 Crisis on Taiwan's External Relations: Views from Japan) を行ったこと、オンラインでの定例研究会開催に向けて準備をしていることが報告された。

### 3. その他

## 議題

#### 1. 第 23 回学術大会について

##### (1) 分科会企画・自由論題報告について (富田企画委員長)

分科会企画 2 件、自由論題報告 2 件の応募があり、すべて採用された。審査者を 2 名から 1 名に変更したことに関連し、必要に応じて 2 人目の審査者に依頼をすることも検討すべきことが確認された。報告者の会員資格要件についての確認が行われた。

##### (2) 会場校の準備状況および大会予算案について (やまだ第 23 回学術大会実行委員長)

① 第 23 回学術大会については、5 月 29-30 日に名古屋市立大学での開催を予定していた、いまだ不透明なコロナ禍の状況を踏まえ、5 月の実地開催の目的が立ちにくいことから、名古屋で開催することの意義に鑑み、名古屋市立大学での開催を 1 年延期して 2022 年 (第 24 回学術大会) とする。第 23 回学術大会については全面オンライン開催とする。実行委員長は松田理事長が兼務する。② 第 23 回大会のシンポジウムについては、山崎理事が中心となり、検討を進める。

#### 2. 日本台湾学会賞検討ワーキンググループによる検討報告結果について (三澤理事)

学会賞検討ワーキンググループ (代表: 山口守) による検討結果をもとに議論が行われたが、結論には至らなかった。常任理事会終了後、三澤理事

が討議結果を4つの案に整理し、12月11日を締め切りとする持ち回り審議により、常任理事会としての素案が決定された。次回の常任理事会で詳細を確認し、常任理事会案を決定する。

3. IJTS 誌との連携協力について（菅野理事・上水流理事）

IJTS 誌からの書評および書評論文推薦に関する協力依頼については、学会報編集委員会の協力を得ることとなった。

4. 会員の入退会、シニア会員への移行について（川上理事）

入会1件、シニア申請1件を承認した。

5. その他

①赤松理事より、学会ロゴの作成について情報提供された。国際交流の機会の増加、学会活動のオンライン化に伴い、学会としてのロゴ作成の必要性が高まっていることから、2021年度の予算案にロゴの作成費を計上する。②北波理事より、12月19日（土）に関西部会大会が開催されるとの情報共有があった。

以上

\*\*\*\*\* 編集後記 \*\*\*\*\*  
・本号は特集「台湾の変化を感じたとき」としてお届けします。2020年から21年にかけて、新型コロナウイルスの流行で、社会は大きく変化しました。過去を顧みると、日本の場合は2011年の東日本大震災、2001年の米国同時多発テロの余波や、1991年から93年にかけてのバブル崩壊など、災害や社会現象が私たちの生活を変えていきました。  
・一方台湾でも、2014年のひまわり学生運動や、1999年の921大地震・2000年の総統選、1987年の戒厳令解除と88年の蔣経国の死去・李登輝の総統就任など、大きな事件が社会の曲がり角となりました。会員の皆様にも、思い返せばあれが転換点だった、と思われる記憶がおりではと思います。

・社会の動きとは別に、台湾を経験する中で、個人的な変化を感じた方もおいでかと思います。人生の分岐点であったり、台湾の見え方が変わるような体験であったり、気づいたときには自身の中ではぐくまれていた精神的変化であったり。本特集では会員の皆様の、個人的体験、あるいは台湾観察にもとづく、「変化」を題材にご寄稿いただきました。会報を読まれる皆様の記憶を刺激するような、あるいは共感を生むような特集になればと願っております。

・ニュースレターは会員による情報交換の場でもあります。台湾と関わるシンポジウム・研究会・展示等の参加記や、学術交流の動向など、積極的なご投稿をお願い申し上げます。

（大東和重）

\*\*\*\*\*

日本台湾学会ニュースレター 第40号

発行：日本台湾学会（代表 松田康博）

発行年月：2021年4月

■日本台湾学会事務局

〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉3-2-2

アジア経済研究所 川上桃子研究室気付

E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

■ニュースレター発行事務局

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

関西学院大学法学部 大東和重研究室気付

E-mail: kaohigashi@kwansei.ac.jp